

隼星

写真とイラストで追う装備部隊

The I.J.N. Carrier Bomber
日本海軍艦上爆撃機

Suisei 隼星

D4Y series
photo history

愛機とともに 2

【陸偵・夜戦・空冷型編】

吉野泰貴 著



彗星

写真とイラストで追う 装備部隊

The I.J.N. Carrier Bomber
日本海軍艦上爆撃機

Suisei 彗星

D4Y series
photo history

愛機とともに 2

【陸偵・夜戦・空冷型編】

吉野泰貴 著



九二式航空兵器観察筐 第 0004 號

艦上爆撃機(彗星)

独特の観察眼で日本陸海軍機を解剖する佐藤邦彦氏。彗星については本書第1巻や『海軍戦闘第812飛行隊』でも紹介しているが、ここでは陸偵型と夜戦型、そして空冷型について解説していただく。

(イラスト・解説/佐藤邦彦)

十三試艦上爆撃機は、速度と(増槽を装備しての)航続力が買われてまずは「二式艦上偵察機一一型」として正式採用された。

▼操縦席左舷に付く銘板の例。

製造所	愛知航空機株式会社
名稱	二式艦上偵察機
型式	D4Y1
發動機	アツタ21型
製造番號	第3156號
自重	2487匁
搭載量	1152匁
全備重量	3639匁
完成年月日	
檢印	⚓ ㊦

二式艦上偵察機
愛知3156號

愛知航空機株式會社

▲尾翼左舷中央に記されるステンシル例。

▶艦上偵察機ながら着艦フックを撤去した「陸偵」仕様の機体。

第121海軍航空隊は第1航空艦隊の二式艦偵部隊で、「雉(きじ)部隊」といわれた。

◀尾翼右舷中央に記されるステンシル例。

雉-06

方向舵修正タブの操作桿

▲彗星一一型まで尾脚は引き込み式。

◀固定自動航空写真機K-8型は偵察機として必須の装備。図は焦点距離500mmの例(250mmのレンズも使用する)。

▲このように胴体後部に設置される。



乾燥孔



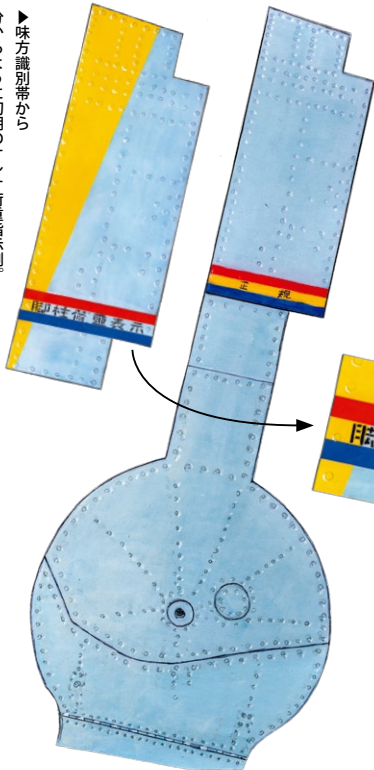
上向き30°の斜め銃の照準器は種々考案されている。

▼機首側面に記される確認欄の例。

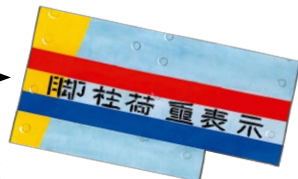
点検	月	日
燃料	立	立
水	立	立
滑油	立	立

夜戦型は機首下面まで暗緑塗粧とした機体が多い。

▶味方識別帯から分かるように初期のオレオ荷重指示例



▲彗星三三型試作機(橙色機体)の脚扉のステンシル部を示す。



▶扉裏のステンシル例。



▲三式一番二八号弾一型 両翼合わせて4本のレールに搭載したロケット弾。

◀脚扉の裏側を青竹色にして示す。複雑な曲面で構成されている。

◀主脚の揚降の作動は油圧でなく電動システムを採用した。電動機構に歯車を多用したことから生産と整備に苦労することとなる。

日本海軍艦上爆撃機 (+ 二式艦偵 & 夜戦) **彗星** D4Y series

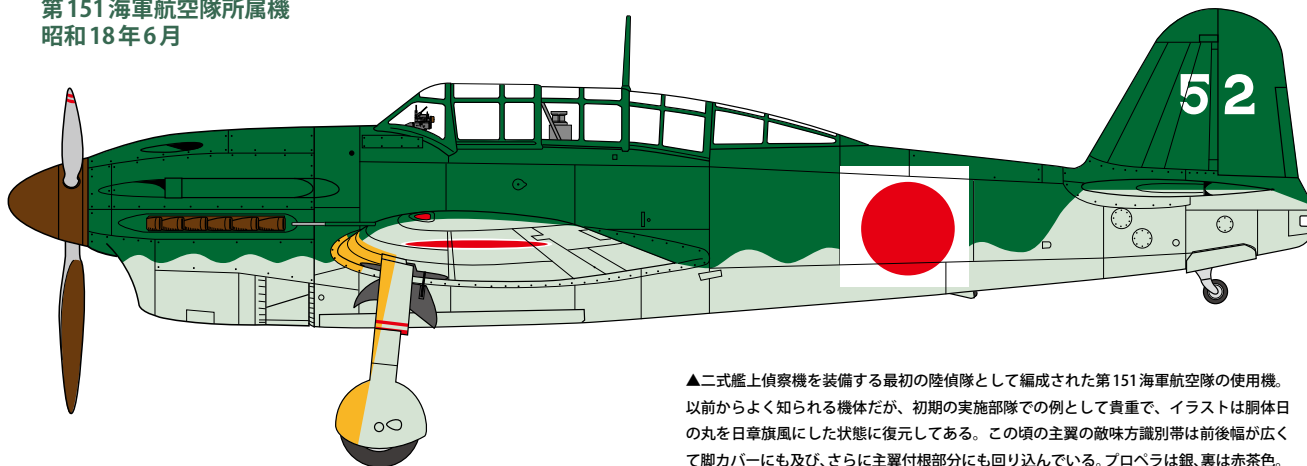
装備部隊の塗装とマーキング

Painting Schemes and Markings of I.J.N. Carrier Bomber Suisei

カラーイラスト・解説 / 吉野泰貴
Color illustrations & text by Yasutaka YOSHINO

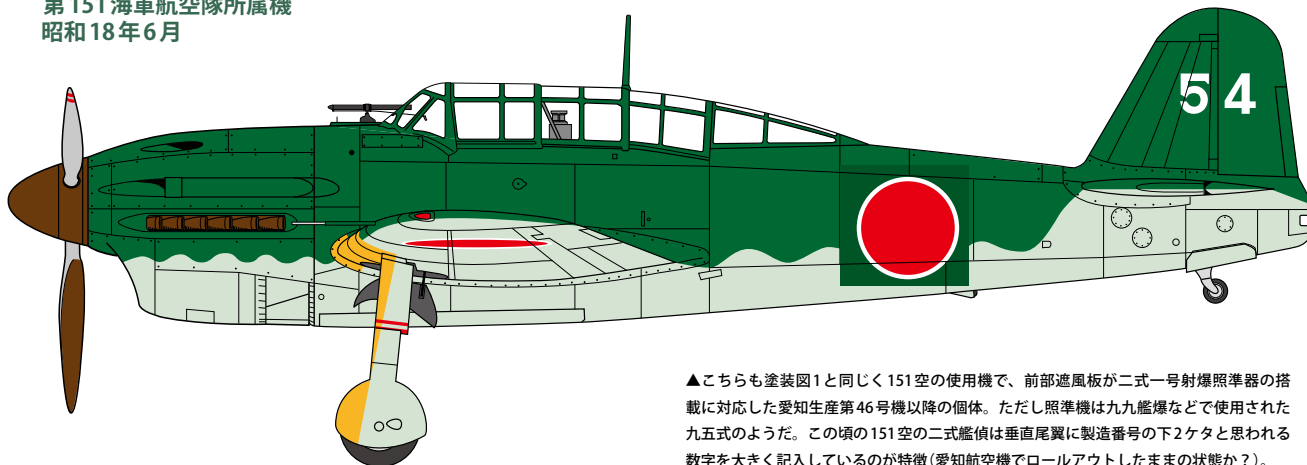
戦闘機より速い急降下爆撃機を、と開発された十三試艦上爆撃機は、まず二式艦上偵察機として採用、ついで艦爆「彗星」として実用化され、やがて空冷エンジン搭載の三三型や20mm斜め銃を搭載した夜戦の一三型も製作された。ここではその多様性に富んだ機体のマーキングを紹介したい。

1. 二式艦上偵察機一一型 (D4Y1-C) 第151海軍航空隊所属機 昭和18年6月



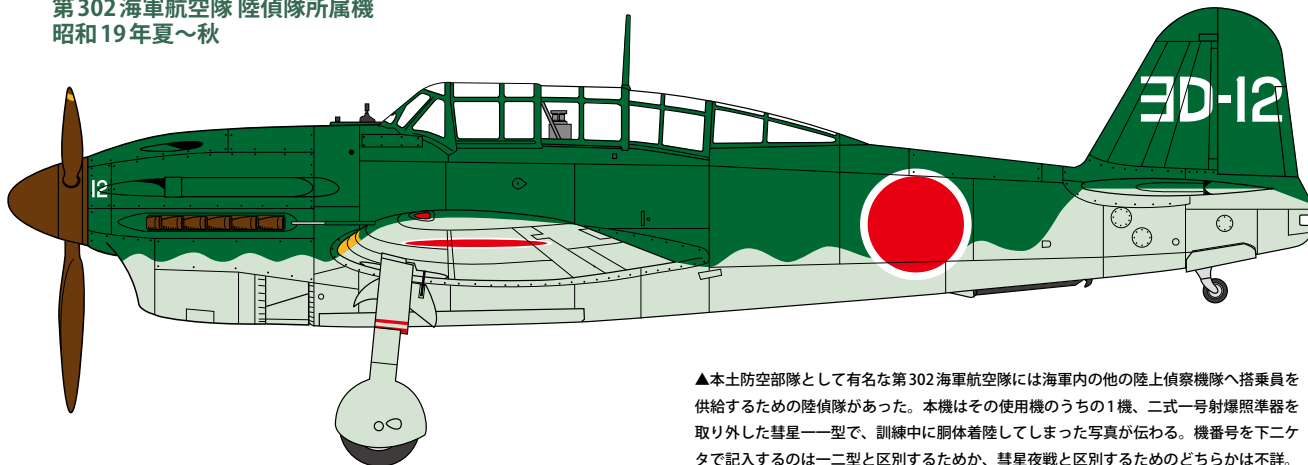
▲二式艦上偵察機を装備する最初の陸偵隊として編成された第151海軍航空隊の使用機。以前からよく知られる機体だが、初期の実施部隊での例として貴重で、イラストは胴体日の丸を日章旗風にした状態に復元してある。この頃の主翼の敵味方識別帯は前後幅が広くて脚カバーにも及び、さらに主翼付根部分にも回り込んでいる。プロペラは銀、裏は赤茶色。

2. 二式艦上偵察機一一型 (D4Y1-C) 第151海軍航空隊所属機 昭和18年6月



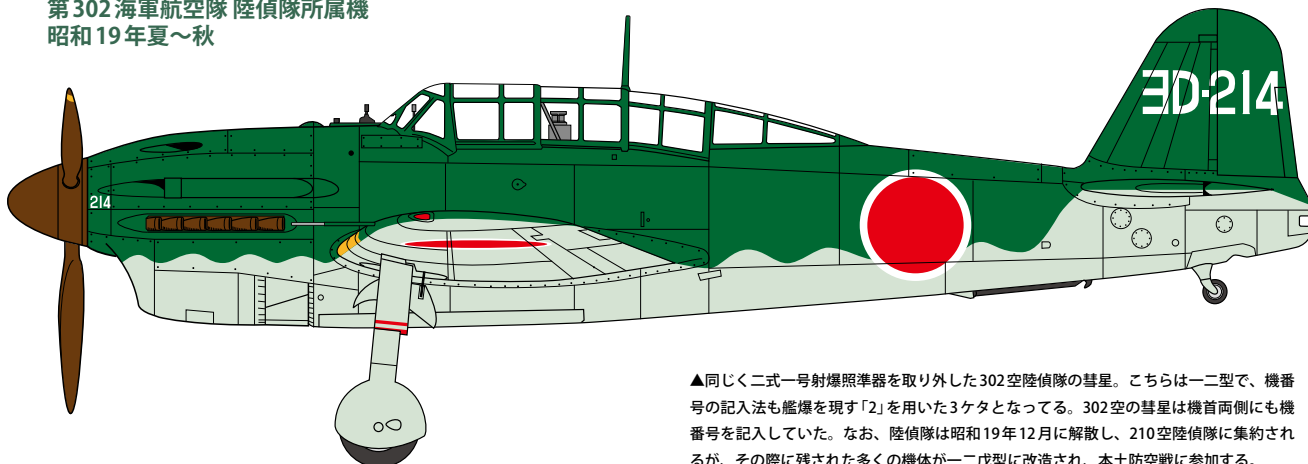
▲こちらも塗装図1と同じく151空の使用機で、前部遮風板が二式一号射爆照準器の搭載に対応した愛知生産第46号機以降の個体。ただし照準機は九九艦爆などで使用された九五式のような。この頃の151空の二式艦偵は垂直尾翼に製造番号の下2ケタと思われる数字を大きく記入しているのが特徴(愛知航空機でロールアウトしたままの状態か?)。

3. 彗星一一型(D4Y1)
第302海軍航空隊 陸偵隊所属機
昭和19年夏~秋



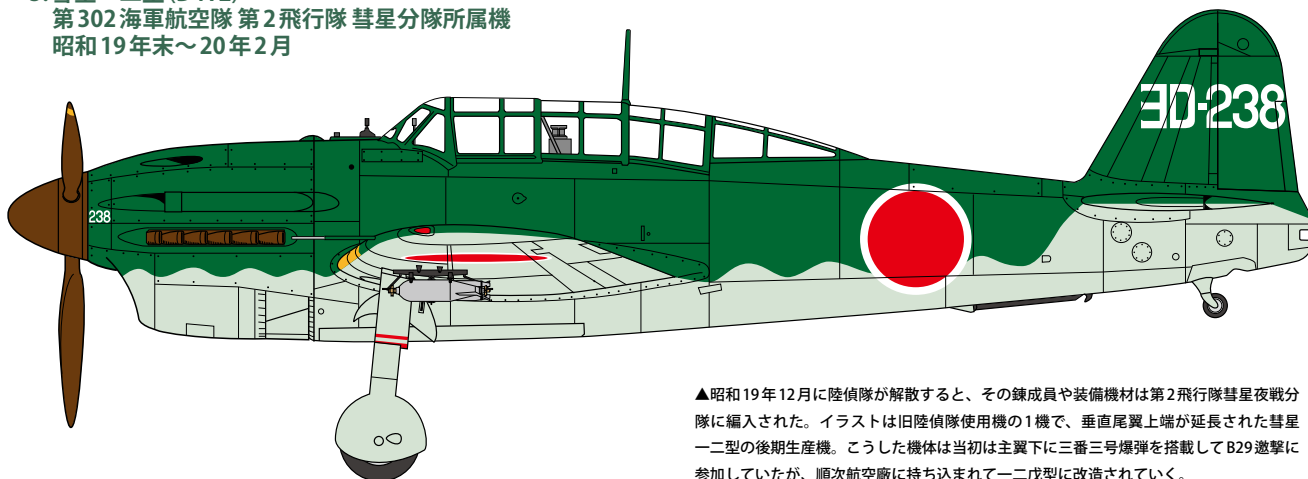
▲本土防空部隊として有名な第302海軍航空隊には海軍内の他の陸上偵察機隊へ搭乗員を供給するための陸偵隊があった。本機はその使用機のうち1機、二式一号射爆照準器を取り外した彗星一一型で、訓練中に胴体着陸してしまった写真が伝わる。機番号を下二ケタで記入するのは一二型と区別するためか、彗星夜戦と区別するためのどちらかは不詳。

4. 彗星一二型(D4Y2)
第302海軍航空隊 陸偵隊所属機
昭和19年夏~秋



▲同じく二式一号射爆照準器を取り外した302空陸偵隊の彗星。こちらは一二型で、機番号の記入法も艦爆を現す「2」を用いた3ケタとなっている。302空の彗星は機首両側にも機番号を記入していた。なお、陸偵隊は昭和19年12月に解散し、210空陸偵隊に集約されるが、その際に残された多くの機体が一二戊型に改造され、本土防空戦に参加する。

5. 彗星一二型(D4Y2)
第302海軍航空隊 第2飛行隊 彗星分隊所属機
昭和19年末~20年2月



▲昭和19年12月に陸偵隊が解散すると、その錬成員や装備機材は第2飛行隊彗星夜戦分隊に編入された。イラストは旧陸偵隊使用機の1機で、垂直尾翼上端が延長された彗星一二型の後期生産機。こうした機体は当初は主翼下に三番三号爆弾を搭載してB29遊撃に参加していたが、順次航空廠に持ち込まれて一二戊型に改造されていく。

日本で見られる唯一の彗星一一型!!

協力/靖國神社遊就館
撮影/吉野泰貴

2016年に大幅な化粧直しがなされた(鷹-13)。パネルラインを当時に近づけ、ダズファスナーを再現。新考証の明るめの濃緑色がまどわれた。



ヤップ島から帰還、復元され、靖國神社遊就館に奉納された彗星一一型523空(鷹-13)は、田中祥一氏以下当時の復元チームや同館学芸員の尽力により往時の姿を少しずつ取り戻しつつある。ここで近年アップデートされたこだわりのディテールを見てみよう。

<http://yusyukan.yasukuni.jp>



▲これまでプロペラスピナー後端の丸いパーツが欠落していた。これは別途奉納された実機パーツが新たに装着された。



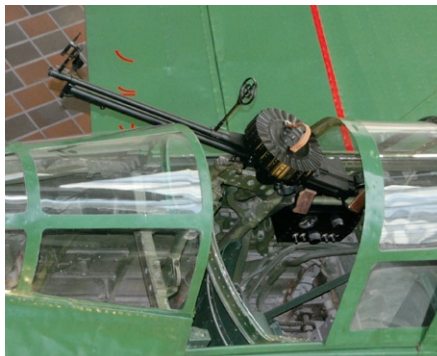
▲敵味方識別帯は主脚カバーにまでかかる幅広のものに。増槽は整形し、複雑な曲線を持った彗星専用330ℓを忠実に再現。



▲空中線の引き込みも、彗星独特の左側胴体の補助支柱を介する様子を再現。支柱頂部の碼子でクルリと回すのも当時見られたもの。



▲新たに再現された胴体左側の足掛。レストアで塞がれた外板を切り欠くと、予想した位置に本来の足掛機構が発見されたという。



▲九二式7.7耗旋回機銃も、実物同様のものが奉納された。

▶一一型の特徴である引込式尾脚のカバーは実機のパーツを採寸して再現(引込部も「いずれは!」とのこと)。尾輪も当時と同じ形状にアルミを削り出したものが新造され、奉納された。



日本海軍艦上爆撃機 彗星

愛機とともに 2

【陸偵・夜戦・空冷型編】

写真とイラストで追う装備部隊

【目次】

九二式航空兵器観察筐【第0004号】	2
日本海軍艦上爆撃機彗星(+二式艦偵&夜戦) 装備部隊の塗装とマーキング	8
日本で見られる唯一の彗星——型！！	16
はじめに	18
◆第6章 陸上偵察機隊	19
第151海軍航空隊	20
第302海軍航空隊陸上偵察機隊	28
◆第7章 彗星夜戦隊	43
第302海軍航空隊 第2飛行隊彗星夜戦分隊/第3飛行隊	44
第131海軍航空隊 夜間戦闘機隊“芙蓉部隊”	58
◆第8章 空冷彗星艦爆隊	71
第701海軍航空隊 攻撃第105飛行隊	72
第601海軍航空隊 攻撃第1飛行隊	80
◆第9章 航跡の果てに	93
宇佐海軍航空隊艦爆隊/神武特別攻撃隊誘導隊/第332海軍航空隊彗星夜戦隊	96
戦場を駆け抜けた彗星	102
残りし翼たち	108
◆巻末資料 艦上爆撃機彗星備忘録 補足	117

【episode】

11. 南の空を飛んだ二式艦偵部隊 第151海軍航空隊の存在意義	25
12. 熱き青春を燃やした 第302海軍航空隊陸偵隊のこと	38
13. 第302海軍航空隊彗星夜戦隊 もうひとつのヒストリー	54
14. 海軍夜間戦闘機隊“芙蓉部隊” 知っておきたいこんなこと	66
15. 戦い続けた最初の彗星艦爆隊 攻撃第105飛行隊の航跡	76
16. 第601海軍航空隊攻撃第1飛行隊 第二御橋隊出撃からの再編	90

【short episode】

1. 教官・教員も特攻へ 宇佐海軍航空隊の彗星	97
2. 突如として上海へ現れた ナツの特攻隊と彗星誘導隊	99
3. 最後にできた彗星隊？ 第332海軍航空隊夜戦隊の彗星	101



コラム

これ、なんでしょう!?	42
機首の塗り分けが直線なわけ	70
彗星の垂直尾翼に記入された番号は？	94
彗星四三型が最初に供給されたのは131空艦爆隊？	126

はじめに

日本海軍の艦上爆撃機「彗星」は、高速を備え、単独で敵戦闘機の警戒網を突破して敵航空母艦を攻撃することができる急降下爆撃機として、「十三試艦上爆撃機」の名で海軍航空技術廠により開発に着手された機体だ。

昭和16年末に完成したその試作機は類いまれなる高性能を発揮。試作機の身分のまま南西方面の戦場(ただしこれは満足に実戦参加せず)に、またミッドウェー海戦にと出勤し、やがてその高速を買われて「二式艦上偵察機」として制式される。

昭和18年初頭に、生産を担当する愛知航空機での完成機がロールアウトしはじめると、この「二式艦上偵察機」は第151海軍航空隊へ供給され、南東方面と呼ばれたラバウルへ進出。零戦をしのぐ高速偵察機として敵陣深くにまで忍び込んだ。

その後、愛知航空機での生産が順調に流れ出し、性能向上型の「彗星一二型」の開発がなされる頃になると、並行して空冷エンジンの金星六一型(あるいは六二型)を搭載する機体を生産し、基地航空部隊へ供給しようという考えが浮かび上がる。これが大戦後期の海軍艦爆隊の屋台骨を支えることになる「彗星三三型」であり、戦時急造型ともいえる「四三型」の登場を見る。

そしてこの万能機を、不足する夜間邀撃兵力を補う

ものとするべく昭和19年になって製作されたのが「彗星一二戊型」と呼ばれた夜間戦闘機型であり、本土防空戦だけでなく、昭和20年4月に始まった沖縄航空作戦で目を見張る活躍をすることとなる。

本書はこうした陸上偵察機型、夜間戦闘機型、そして空冷エンジン搭載型の「彗星」装備部隊に焦点を当て、その活躍を紹介するものである。

ただ、やはり第1巻と同様に全装備部隊を網羅しようというものではないことをあらかじめご理解いただきたい。同じく、写真を掲載した部隊については簡単な部隊戦史や人物紹介を極力記述することを心がけた。

なお、巻末には、現在わかりえている愛知航空機、21空廠製作の「彗星」の生産状況や製造番号を掲載したので参考にされたい。

「彗星」については、まだまだ謎や誤解のある部分が山積みだが、本書により関わりのある搭乗員、整備員、そして製作会社の奮闘ぶりを伝える一助となれば幸いである。

吉野泰貴

●日本海軍航空隊のしくみと用語について

〔航空隊？ 航空基地？ 飛行場？〕

太平洋戦争の日本海軍航空隊の実像に迫るには、じつは大正時代にまでさかのぼらなければならない。

日本海軍は大正5(1916)年3月に「海軍航空隊令」という決まりを定め、横須賀海軍航空隊を設置した。これはまだ飛行機が海のものとも山のものともわからない時代のこと。海軍航空隊は横須賀、呉、佐世保、舞鶴など軍港に置かれ、航空部隊だけでなく、飛行場の管理・運営を行なうとされていた。だから横須賀海軍航空隊と言えば航空部隊としての組織だけでなく、飛行場や建物、周辺の付随施設までが含まれている。

この制度のまま海軍航空隊の数は拡充され、支那事変、太平洋戦争へと繰り出していくのだが、例えば北海道の千歳に本拠を置く千歳海軍航空隊が内南洋や南東方面へと進出する際には千歳空残置隊がここに留まり、はるか南洋にいる千歳空司令の指揮を受けて飛行場や施設の管理をしなければならなかった。戦いが激化してくればそれどころではない。

こうした繁雑さを取り除くため、昭和17年11月1日付けで実施されたのが実戦部隊の名称を番号化することと、飛行場の管理を切り離すことであった。これにより、実戦部隊の展開する飛行場はその時々で布陣する航空隊が管理すればよいことになった(これでも不便なため、のちに基地管理を専門とする「乙航空隊」という制度ができた)。

よく第302海軍航空隊のことを厚木空などと称するのはこうした古い慣習と呼称が入りまじっているからであり、この場合の厚木空は組織としての厚木海軍航空隊(そういう名称の別の航空隊があるからややこし

い)ではなく、厚木航空基地ということになる。

そのため、本書では横須賀空の他、宇佐空や霞ヶ浦空などの練習航空隊で基本的に本拠を移動しない部隊以外には、組織としての航空隊を「〇〇空」と略記する以外には、「航空基地」あるいは「基地」と表記するようにしている。「飛行場」と書く場合には周辺施設を含まない、滑走路とエプロン、格納庫や指揮所などの施設に限定した意味だ。

〔部隊名の略記は？〕

海軍航空部隊の略称略記は以下の通りである。

第1航空艦隊 → 1航艦

第26航空戦隊 → 26航戦

第151海軍航空隊 → 151空

戦闘第351飛行隊 → 戦闘351、あるいはS351

攻撃第105飛行隊 → 攻撃105、あるいはK105

偵察第61飛行隊 → 偵察61、あるいはT61

〔時間の表記は？〕

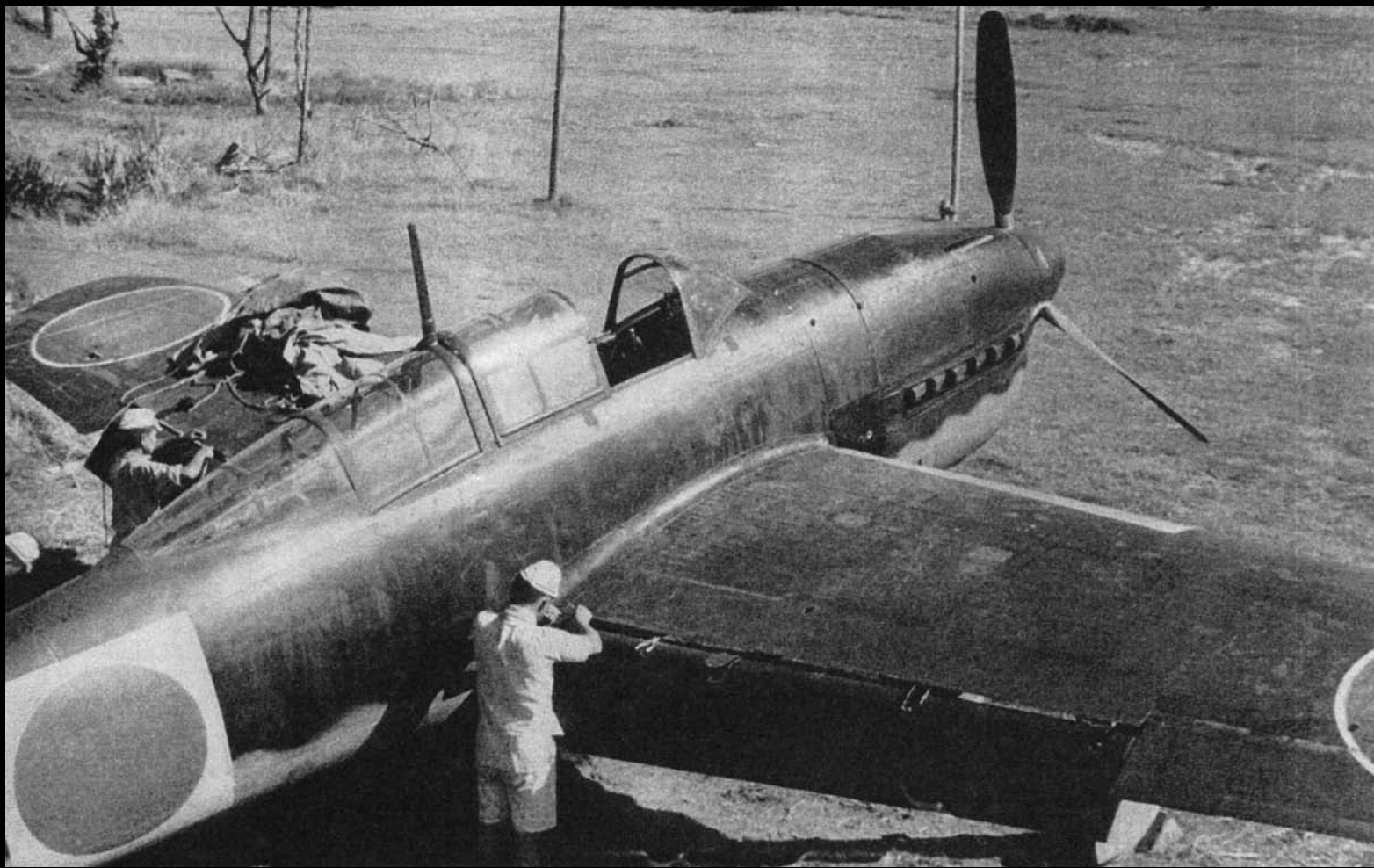
海軍における時間表記は万国共通、24時間制だ。日本海軍では地球上のどこにいても日本時間を用いるのが習わし。

午前零時を0000、午前8時を0800、午後1時を1300と表し、最後に「時」などは付けない。

第6章

陸上偵察機隊

昭和16年末に完成した「十三試艦上爆撃機」は高性能を発揮し、早くも試作機が実戦投入されるほど。その実績を買われて昭和17年7月には「二式艦上偵察機」として制式され、昭和18年初頭には生産型の実戦投入が始まる。ここでは本機を装備した陸偵隊を見てみよう。



基地航空隊に供給された二式艦上偵察機一一型。愛知生産第45号機までの機体のひとつで、前方遮風板が平面になったタイプを装着している。主翼の日の丸は通常の白フチだが、胴体の日の丸が日章旗のようになっているのに注意。これは昭和18年夏頃の日本海軍機に見られた特徴で、一式陸攻や九九艦爆などにも例がある。

第151海軍航空隊

日本本土をはるかに離れたニューブリテン島のラバウル東飛行場で整備を受ける二式艦上偵察機一型。プロペラ前面は銀、主翼の敵味方識別帯も前後幅の広いもので主脚カバーにも及んでいる。主翼前縁に記入された〔29〕は製造番号29(ダミー数字を付けた329)を表すものか? 二式艦偵/彗星一型に独特の引込み式尾脚とそのカバーに注意。第151海軍航空隊はそれまで戦闘機隊や陸攻隊に分散配置されていた陸偵隊を発展的に集約した初の陸上偵察機航空隊と言えるもので、新鋭の二式艦上偵察機の他、陸軍から借用した百式司令部偵察機や、二式陸上偵察機も使用した。







ラバウル東飛行場に駐機する151空の二式艦上偵察機一型(52)。愛知生産第45号機までの、前方遮風板が平面になったタイプで九八式射爆照準器を搭載。偵察席後方の回転風防の部分には九二式7.7mm旋回機銃の尾部が見えている。ここで掲載する何機かの151空の二式艦偵は通常の日軍海軍機の機番号の記入例とは異なり、愛知航空機でロールアウトした、製造番号の下2ケタを垂直尾翼に大書した状態で使用されていたようだが、そうであれば生産第52号機となる本機は艦爆型の風防でなければならないはず!?

よく見ると本機の胴体の日の丸には白フチの外側を四角く塗りつぶした痕が見られ、もともと日章旗風の白地だったことがわかる。後方の機体は第251海軍航空隊が要務飛行や基地移動の際に重宝した九六式陸上輸送機(九六式陸上攻撃機の輸送機型)(UI-902)で、右奥にも見える(ただしこちらは他隊の九六陸攻かもしれない)。

前進基地のブインと思われる飛行場から発進にかかる 151 空の二式艦上偵察機一一型 (54) で、右主翼にだけ 330 ℓ 増槽を懸吊している。本機は前部遮風板をいわゆる艦爆タイプにした愛知製造第 46 号機以降の生産機で、照準器は九九艦爆などが使用した筒型の九五式 (あるいは九九式) を搭載しているようだ。ただ、偵察機としてはこの窓枠の多い形状は好まれなかったようで、昭和 19 年初頭には偵察部隊供給用の二式艦偵 / 彗星の遮風板を視界良好な平面風防に改造するよう指示されている。

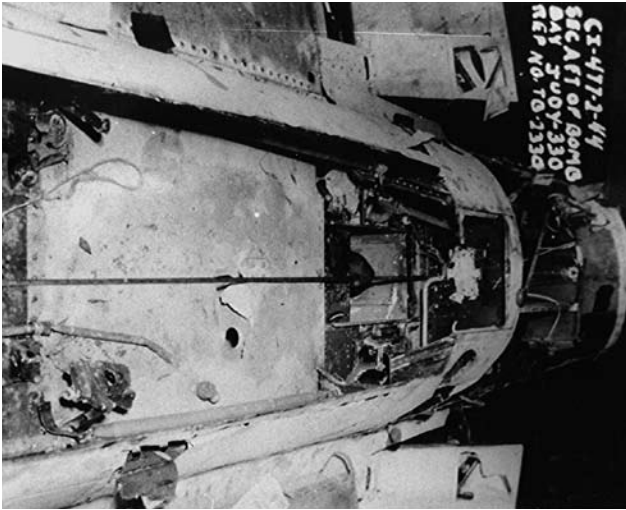


鉄板の敷かれたエプロンから離陸点へ向かう 151 空の二式艦上偵察機一一型 (53)。画面奥に駐機している機体は 151 空で使用していた百式司令部偵察機 II 型のような。登場した時には零戦をしのぐ高速と艦爆ゆずりの機動性から局地偵察をものもしなかった二式艦偵も、昭和 18 年末には陰りが見え始め、クシの歯が欠けるように未帰還となるペアが出始める。昭和 19 年 2 月のトラック空襲ののちラバウルを引揚げた 151 空は 3 月 4 日付けで特設飛行隊制に移行、その飛行機隊は偵察第 101 飛行隊となった。

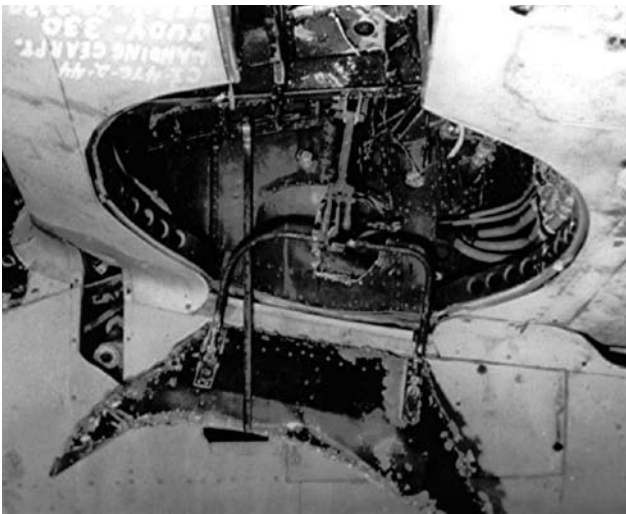


■米軍に回収された151空の二式艦偵一型 愛知製造第330号(通算第30号機)

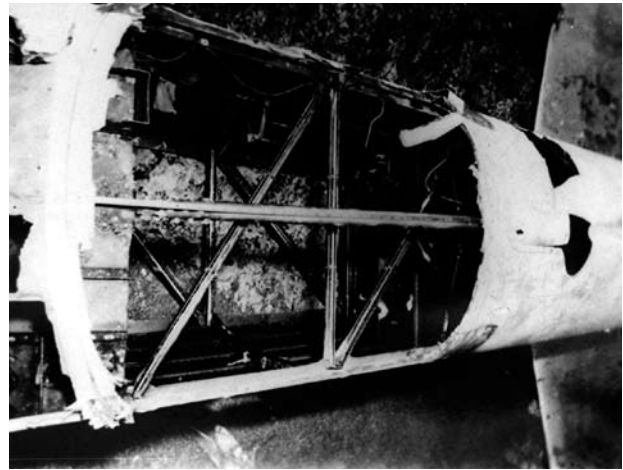
昭和18年5月にラバウルへ進出した151空の二式艦偵はソロモン諸島全域を駆け巡ったが、ぼつり、ぼつりと未帰還機を出すようになる。写真はBatua Pointで回収された二式艦偵一型で愛知製造第330号機。昭和18年8月15日にブインを発進し、ベララベラ島レンドバ方面敵艦船動静偵察へ向かって未帰還となった前田孝雄2飛曹一菊池勇2飛曹ペアの搭乗機のように、想いは複雑だが、初期の二式艦偵／彗星を知る上で貴重である。〔写真提供：James Long／協力：宮崎賢治〕



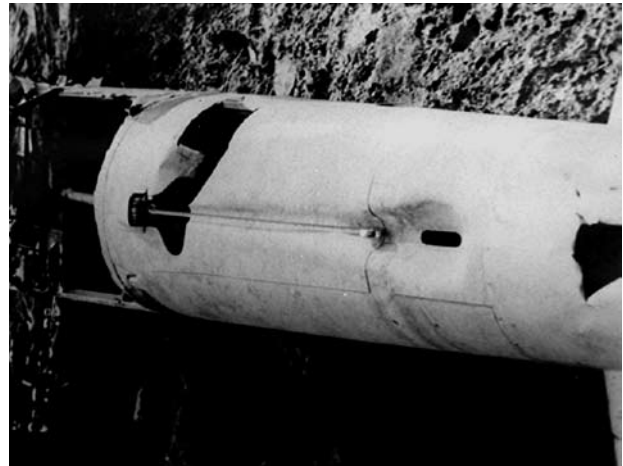
▲330号機の爆弾倉を見る(左が機首方向)。内部には作り付けの増加タンクが設置されている。ところが、「爆弾倉内の機装を艦爆と共通しておけば、偵察にも攻撃にも使えるのでは!？」との意見が浮上、愛知において生産される二式艦偵一型には増加タンクが設置されなくなっていく。



▲330号機の右主脚収納部、並びに胴体側主脚カバー。内側はかなり暗い色で塗装されているが、これも本機が艦上機たるゆえん。



▲こちらは後部胴体下面。外板がはずれているため、本機独特の斜めの補強桁の様子がよくわかる。二式艦偵というとF8固定写真機搭載がデフォルトと思われがちだが、多くの機体はこのように未搭載であった。



▲上写真の右側に続いている胴体後半で、ちょうど着艦フックの部分。だが、装着されているフックは実用性が疑わしい形で、周囲のパネルの様子も、のちの生産型とはだいぶ違っている。

▼引き込式の尾脚部分。手前が機首方向。向かって右側のカバーには「二式艦上偵察機愛知330号右」と記載されている。ちょうどカバーの開閉機構部にメジャーを当てているため充分に見られないのが残念。



南の空を飛んだ二式艦偵部隊 第151海軍航空隊の存在意義

十三試艦上爆撃機の高性能を知った日本海軍は試作機を戦線に投入、その実績は量産機もできていないのに「二式艦上偵察機」と制式されるほどだった。やがて愛知航空機で完成した量産機は、初めての陸上偵察航空隊として編成された第151海軍航空隊へ供給される。

日本海軍の偵察機の運用法

日本海軍にあった「陸上偵察機＝陸偵(りくいてい)」という機種はフロート付きの「水上偵察機＝水偵(すいてい)」に対する言葉で、飛行場で離発着する一般的な車輪式の偵察機のことを意味する。そのなかで航空母艦から発着艦可能な機体を艦上偵察機と呼ぶわけだ。

艦隊の補助兵力として醸成されてきた日本海軍の偵察機は、高度500～300mを飛んで水平線を見張り、洋上を行動する敵艦隊のマストを探し求める「索敵」が主任務であり、艦上機であればこれは艦上攻撃機で代用できると考えられて年を重ねていた。

ところが、昭和12年に日華事変が始まると、敵飛行場や軍事施設など、陸上の固定目標への「局地偵察」が必要となり、また時には味方の戦闘機隊を敵地への行き帰りに誘導する任務も負うようになった。このために新たに創設されたのが陸偵隊と呼ばれる組織で、陸軍の九七式司令部偵察機を海軍仕様とした九八式陸上偵察機や、セバスキー複座戦闘機、わずかに2機の試作に終わった九七式艦上偵察機などを使用して大陸での偵察活動に従事した。

やがて太平洋戦争開戦となり、艦隊決戦の主役が航空母艦とその搭載機になると、敵味方ともに「我先に！」と敵を追い求める必要が浮上してきた。零戦をしのぐ最高速度を難なく発揮した十三試艦上爆撃機が、艦上偵察機、あるいは陸上偵察機として期待されるようになったのは、こうした事情からである。

初めて編成された陸偵航空隊

それまで日本海軍の陸偵隊は戦闘機隊や陸攻隊に1個分隊(だいたい6～9機)が配備される形であった。例えば緒戦期に快進撃を演じた台南空や3空がそれであり、戦中に6空などが新編されるとこうした旧来の陸偵隊からのれん分けのように基幹員が抽出されていった(どの機種も同じだが)。

ところが、南東方面での戦いが膠着状態となった昭和18年初頭になると、各航空隊へ分散配備されていた陸偵隊をま

とめ、1個の航空隊として効率よく一元化した運用をしようという考えが醸成されてくる。

こうして「い」号作戦真っ最中の昭和18年4月15日付けでラバウル東飛行場で新編成されたのが第151海軍航空隊である。同日付けで渡邊薫雄中佐(海兵50)が11航戦参謀から151空司令に補され、奥田重信少佐(海兵57)が21航戦司令部附から151空飛行長に、また西本寿大尉が251空整備長から151空整備長にと発令された。

その基幹は204空(旧6空)陸偵隊と253空(旧鹿屋空)陸偵隊で、204空分隊長の美正正己大尉(海兵64)、253空分隊長の時枝重良大尉(海兵66)が151空分隊長に発令。福永茂俊飛曹長、渡辺勝上飛曹(以上操縦)、小古良夫少尉、小滝清一飛曹長(以上偵察)らが253空、高橋武志1飛曹(操縦)や石田徳高飛曹長、木下晟一飛曹長、岡林恒晴上飛曹、山崎雄雄1飛曹(以上偵察)らが204空からの転入隊員であった。

開隊当初の主力装備機は陸軍から借用の百式司令部偵察機Ⅱ型と二式陸上偵察機(ただし、開隊から間もなく二式陸偵の記述は見られなくなる)。

5月になると内地で二式艦上偵察機の操訓を終えた一団がいよいよ151空へ進出してきた。これが試作機、あるいは空母飛行機隊での運用以外で、初めて実施部隊へ供給された二式艦偵の例である。



▲陸軍の百式司令部偵察機Ⅱ型。204空陸偵隊や253空陸偵隊の主装備機で、151空でも二式艦偵とともに使用された。

その戦いぶりは別表に掲げる通りであったが、204空や253空以来の隊員、とくに操縦員はもっぱら百式司偵で飛行し、二式艦偵の操縦員とは棲み分けがなされていた様子が行動調書からもうかがえる（偵察員はどこの部隊でも機種を選ばない）。

例えば、6月29日にキリウイナ島不時着機捜索にラバウルから出撃した渡辺勝上飛曹や馬場尾滋1飛曹は通常は百式司偵で作戦をしているので、行動調書の「fr 二式(二式艦偵の意)」は誤記ではないかと思われるのだ。

151空に供給された二式艦偵は愛知で生産された極初期の機体であり、前方遮風板が平面になった生産第45号機までの特徴を持ったものも見られ、その場合は九八式射爆照準器を、46号機以降の艦爆型と同様の枠の多い前方遮風板を有する機体の場合は、九九艦爆などと同様の筒型の九五式(あるいは九九式)射爆照準器を搭載していた。

二式艦上偵察機というF8固定写真機を偵察席後方に搭載しているものと思われがちだが、151空の当初の機体は写真機を搭載しておらず、目視偵察や手持ち写真機での作戦飛行が多かった。ただ、50mmレンズのカメラで高度1万mから撮影すると2万分の1の縮尺写真となり、飛行場の滑走路の長さが算出できるなど、垂直写真による偵察は情報量が多く、次第に写真機搭載仕様に置き換わっていく。その場合は固定機銃や旋回機銃を外して機体の軽量化を図っていた。

二式艦上偵察機一型の最大速度540km/hは百式司偵の604km/hと比べて60km/hも遅かったが二号零戦(三二型、二二型)と同等であり、何と言っても艦爆ゆずりの運動性は大きな強みであった。

9月1日に21航戦が開隊されると151空は11航艦の直率となったが、8月までにわずか3機であった未帰還も、米軍の戦爆連合が大挙としてラバウルやブインに來襲するようになった9月以降になると文字通り櫛の歯が欠けるように増加

していく。

なお、151空には気象専門の清野善兵衛少尉という予備学生出身士官がおり、第8気象隊からの少ない気象情報に、前日の作戦飛行で搭乗員たちが見てきた雲の形状などの目撃情報(当該空域の気圧を予想できる)を加えた天気図を作成し、偵察に出る搭乗員たちに手渡していた様子が伝えられる。

11月に151空へやってきた立川惣之助大尉(海兵66)が12月1日付けで分隊長となると、その同期生である時枝大尉は12月15日付けで横須賀空へ転勤していった。

偵察第101飛行隊へ

昭和19年2月17日にトラックが大空襲を受けて壊滅的となるとラバウルへ兵力を展開しておく余裕はなくなり、151空飛行機隊もトラックへ後退することとなったが、この時に飛行長の堀知良少佐は地上員とともにラバウルへ残留、以後終戦まで自給自足の籠城戦の指揮をとることとなる。

そしてトラックへ移動した151空飛行機隊は3月4日付けで特設飛行隊制へと移行、偵察第101飛行隊として独立した組織になり151空の指揮下へ入る。

同日付けで151空分隊長であった江崎隆之大尉(海兵63)が初代T101飛行隊長に補され、同じく151空分隊長だった立川惣之助大尉がT101分隊長に発令、先年の10月に151空へ着任した児玉一男少尉、長島勝彬少尉、阪井満少尉らもT101附となっているが、長島少尉らはラバウルに残留したままで、堀飛行長らと現地で終戦を迎えている。

この151空T101の二式艦偵は、特練を卒業した田中三也上飛曹(甲飛5)を機長にマリアナ沖海戦直前にラバウルへと前進し、ソロモン諸島やアドミラルティ方面の挺身偵察を実施して見事成功させることとなる。

■ 151空における二式艦偵の作戦状況(昭和18年5月～8月)

期日	操縦員			偵察員			出撃基地	任務
	氏名	階級	期別	氏名	階級	期別		
05.21	佐藤正治	飛長	丙3	芦川秀夫	中尉	偵練21	ラバウル	ブナ、ワードフンド海峡間敵艦船動静偵察
05.27	市野明	上飛曹	操練34	木下晟一	飛曹長	偵練25	ラバウル	ツラギ、ルンガ泊地及その附近艦船動静偵察
05.28	佐藤正治	飛長	丙3	石田徳高	飛曹長	乙6	ラバウル	グッドイナフ飛行場進撃路天候偵察に敵情偵察
06.01	佐藤正治	飛長	丙3	石渡静	1飛曹	偵練47	ラバウル	ポートモレスビー、アバウ間敵艦船偵察
06.03	佐藤正治	飛長	丙3	杉本通泰	中尉	海兵69	ラバウル	グッドイナフ飛行場攻撃進撃路天候偵察に敵情偵察
06.07	市野明	上飛曹	操練34	西本幸一	上飛曹	偵練34	ラバウル	ムリア島及グッドイナフ島偵察
06.08	市野明	上飛曹	操練34	西本幸一	上飛曹	偵練34	ラバウル	マライタ島敵艦船偵察
06.12	市野明	上飛曹	操練34	杉本通泰	中尉	海兵69	ブイン	攻撃進撃前進路にルッセル島附近上空天候偵察
06.17	不詳			山崎静雄	1飛曹	偵練46	ラバウル	不時着機捜索
06.18	佐藤正治	2飛曹	丙3	山崎静雄	1飛曹	偵練46	ラバウル	チョイセル島周辺不時着機捜索
06.25	市野明	上飛曹	操練34	西本幸一	上飛曹	偵練34	ラバウル	ルッセル・ガ島方面敵艦船動静偵察
06.29	渡辺勝	上飛曹	操練27	藤井順一	2飛曹	甲7	ラバウル	キリウイナ島不時着機捜索(百式司偵か?)
	馬場尾滋	1飛曹	操練49	中村重利	2飛曹	乙13	ラバウル	キリウイナ島不時着機捜索(百式司偵か?)
07.08	佐藤正治	2飛曹	丙3	鈴木国男	上飛曹	甲5	ラバウル	ニュージョージア付近敵情偵察
07.12	市野明	上飛曹	操練34	渡辺奏	中尉	海兵69	ブイン	ニュージョージア島当付近敵艦船偵察

期日	操縦員			偵察員			出撃基地	任務
	氏名	階級	期別	氏名	階級	期別		
07.16	市野明	上飛曹	操練34	杉浦修(脩)	1飛曹	甲6	ブイン	ニュージョージア、レンドバ方面偵察
07.19	佐藤正治	2飛曹	丙3	西本幸一	上飛曹	偵練34	ブイン	ガ島方面艦船動静偵察
07.21	佐藤正治	2飛曹	丙3	鈴木国男	上飛曹	甲5	ブイン	レンドバ島付近艦船動静偵察
07.22	川辺利美	2飛曹	乙12	濱田肇	2飛曹	乙11	ラバウル	キリウイナ島偵察
	村上佐太郎	飛長	丙7	小野安衛	2飛曹	普電52	ラバウル	ムルア島敵情偵察(未帰還)
07.26	市野明	上飛曹	操練34	西本幸一	上飛曹	偵練34	ブイン	ニュージョージア島周辺敵艦船動静偵察
07.29	白鳥純壽	上飛曹	甲4	杉本通泰	中尉	海兵69	ブイン	ニュージョージア周辺敵情偵察
08.03	小山善一	飛曹長	甲1	藤井順一	2飛曹	甲7	ラバウル	駆逐艦風捜索
	市野明	上飛曹	操練34	時枝重良	大尉	海兵66	ラバウル	ウッドラーク飛行場及び附近艦船薄暮時偵察
08.04	佐藤正治	2飛曹	丙3	鈴木国男	上飛曹	甲5	ブイン	フロリダ島、ルンガ泊地附近艦船偵察
	白鳥純壽	上飛曹	甲4	西山良	上飛曹	甲4	ブイン	ニュージョージア附近敵情偵察
08.06	白鳥純壽	上飛曹	甲4	西山良	上飛曹	甲4	ブイン	ニュージョージア偵察
08.07	前田孝雄	2飛曹	丙3	藤井順一	2飛曹	甲7	ブイン	ニュージョージア方面敵情竝に天候偵察
	前田孝雄	2飛曹	丙3	藤井順一	2飛曹	甲7	ブイン	攻撃隊の天候竝にニュージョージア方面敵情偵察
08.08	杉浦二郎	2飛曹	乙12	渡辺湊	中尉	海兵69	ブイン	レンドバ港湊偵察
08.09	杉浦二郎	2飛曹	乙12	渡辺湊	中尉	海兵69	ブイン	レンドバ港湊偵察
	市野明	上飛曹	操練34	時枝重良	大尉	海兵66	ブイン	ガダルカナル、フロリダ島方面敵艦船動静偵察
08.11	結城律	上飛	丙10	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	ニュージョージア方面天候偵察及艦船偵察
	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ラバウル	敵輸送船団索敵偵察竝に攻撃隊進撃路天候偵察ムルア、キリウイナ島敵情偵察
08.12	若松幸三	上飛	丙10	西山良	上飛曹	甲4	ラバウル	ニュージョージア方面敵艦船動静偵察
08.13	若松幸三	上飛	丙10	西山良	上飛曹	甲4	ラバウル	ニュージョージア方面敵艦船動静偵察(1回目)
	若松幸三	上飛	丙10	西山良	上飛曹	甲4	ラバウル	ニュージョージア方面敵艦船動静偵察(2回目)
	市野明	上飛曹	操練34	時枝重良	大尉	海兵66	ブイン	ガ島ルンガ泊地及びユリ泊地攻撃目標(夜間雷爆撃)偵察
08.14	若松幸三	上飛	丙10	西山良	上飛曹	甲4	ブイン	ニュージョージア方面敵艦船動静及敵情偵察
	内田信次	2飛曹	丙2	杉本通泰	中尉	海兵69	ブイン	ビスビス角パイロコ間アルンデル島ムンダ飛行場写真偵察
08.15	前田孝雄	2飛曹	丙3	菊池勇	2飛曹	乙12	ブイン	ベララベラ島レンドバ方面敵艦船動静偵察(行方不明)
	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ブイン	ニュージョージア、ルッセル間敵艦船動静偵察
08.16	結城律	上飛	丙10	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	ニュージョージア方面天候偵察及艦船偵察帰途不時着機捜索
08.17	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ブイン	ガ島フロリダ島ルッセル島附近敵艦船偵察並にチョイセル島不時着機捜索
	杉浦二郎	2飛曹	乙12	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	ニュージョージア、ベララベラ艦船偵察
08.18	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ブイン	ベララベラ島及ニュージョージア附近敵動静偵察
08.19	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ブイン	ベララベラ、ニュージョージア敵動静偵察
08.20	若松幸三	上飛	丙10	石渡静	1飛曹	偵練47	ブイン	ベララベラ、レンドバ、ニュージョージア艦船動静偵察
08.21	若松幸三	上飛	丙10	石渡静	1飛曹	偵練47	ブイン	ベララベラ、レンドバ、ニュージョージア艦船動静偵察
08.22	若松幸三	上飛	丙10	石渡静	1飛曹	偵練47	ブイン	ベララベラ、レンドバ、ニュージョージア艦船動静偵察
	佐藤正治	2飛曹	丙3	小滝清一	飛曹長	偵練40	ブイン	イサベル島北方海面並にガ島方面敵艦船動静偵察
08.23	小山善一	飛曹長	甲1	山本成	上飛曹	甲4	ブイン	中水道イサベル北岸敵艦船動静竝に天候偵察終わってチョイセル北方海面にて駆逐艦隊を攻撃すると思われる敵攻撃隊の対空哨戒
08.23	佐藤正治	2飛曹	丙3	山本成	上飛曹	甲4	ブイン	中水道及びギゾ海峡附近敵艦船動静竝に攻撃隊に依る戦果偵察ピロア、レンドバ、ニュージョージア周辺一帯目視偵察
08.24	若松幸三	上飛	丙10	山本成	上飛曹	甲4	ブイン	ピロア、レンドバ、ムンダ及びニュージョージア附近敵情及び艦船偵察
08.25	結城律	上飛	丙10	濱田肇	2飛曹	乙11	ブイン	ピロア、レンドバ港、ムンダ附近艦船偵察
	市野明	上飛曹	操練34	時枝重良	大尉	海兵66	ブイン	イサベル島北方及東方海面ツラギ方面敵艦船動静を偵察し友軍駆逐隊作戦を有利に導くとす
08.27	結城律	上飛	丙10	濱田肇	2飛曹	乙11	ブイン	ピロア、レンドバ港、ムンダ附近艦船偵察
	杉浦二郎	2飛曹	乙12	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	敵艦船動静及天候偵察
08.28	杉浦二郎	2飛曹	乙12	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	ブラグ島ルッセル諸島敵艦船動静偵察及天候偵察
	結城律	上飛	丙10	濱田肇	2飛曹	乙11	ブイン	ベララベラ、レンドバ島ムンダ附近艦船偵察
08.29	杉浦二郎	2飛曹	乙12	梶原輝正	上飛曹	偵練40	ブイン	ニュージョージア方面敵艦船及天候偵察
08.30	若松幸三	上飛	丙10	山本成	上飛曹	甲4	ブイン	ピロア敵艦船の動静及び天候偵察、レンドバ港及び周辺艦船偵察
	佐藤正治	2飛曹	丙3	小古良夫	少尉	偵練28	ブイン	ガ島方面敵艦船動静偵察(未帰還)
08.31	若松幸三	上飛	丙10	山本成	上飛曹	甲4	ブイン	ピロア敵艦船及天候偵察、レンドバ港及びムンダ附近敵情及艦船偵察

※「151 空行動調書」から抜き出したもので推定を含む(一部に百式司偵と二式陸偵の誤記もあると思われる)。

※ 8月15日の前田孝雄2飛曹-菊池勇2飛曹ペアの二式艦偵がP24掲載写真の機体と思われる。当日0442にブインを発進、0615に「ギゾ島附近駆逐艦×5、輸送船中型×5南下中」と、0625に「ベララベラ天候晴、雲量3、雲高1000m、視界10km」と打電してきたのち、0640に「油温上る、不時着するやも知れず、位置チョイセル島中西海岸」との打電があり、0650「不時着す、位置ウチ5ソ」との第4電を報じて以後行方不明となっている。

ISBN978-4-499-23233-3

C0076 ¥3800E

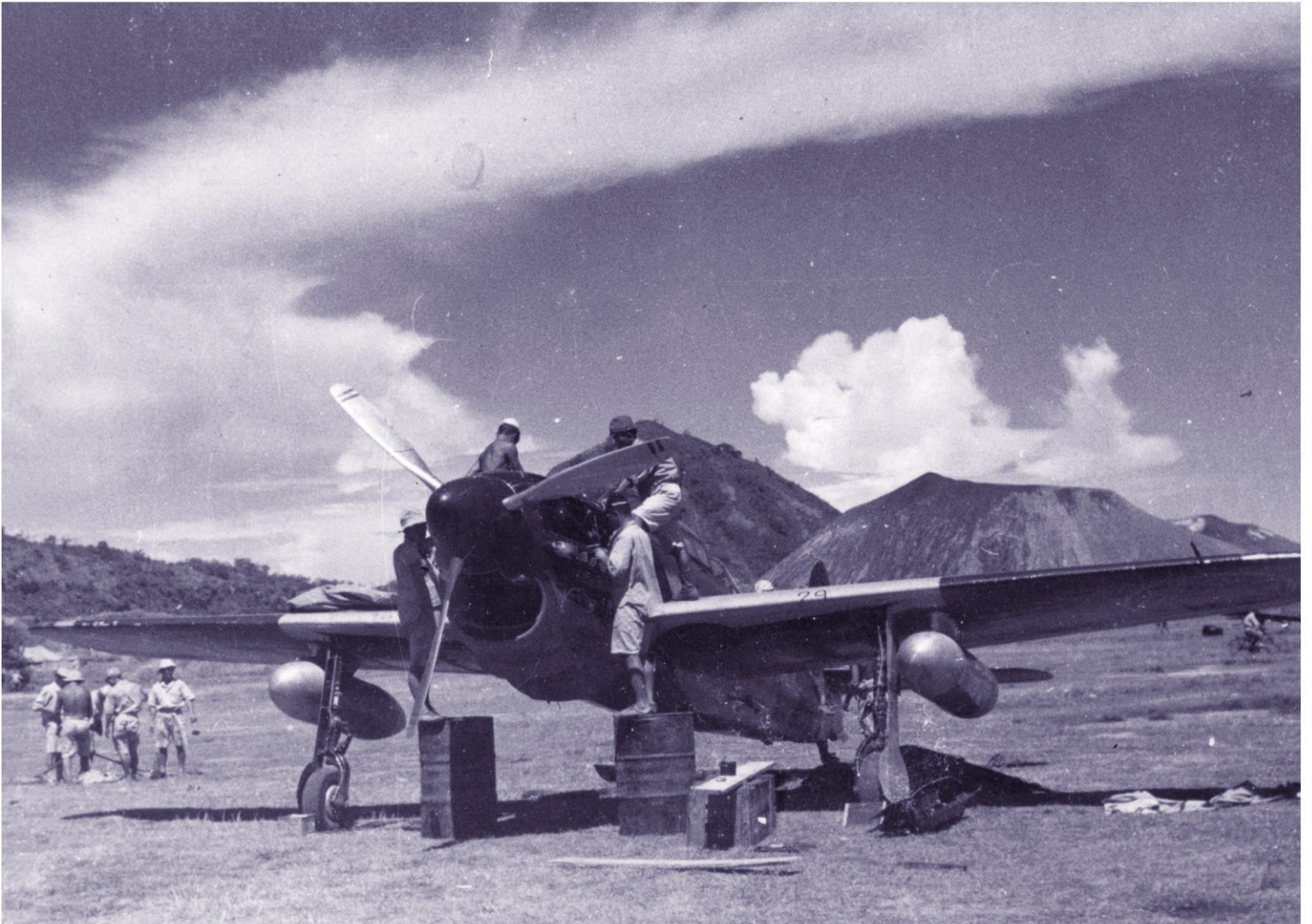


9784499232333



定価(本体3,800円+税)

1920076038006



The I.J.N. Carrier Bomber D4Yseries Suisei photo history